

一年ほど前から茶の湯に夢中になっている。茶の湯は日本文化の総合芸術と言われていた。だがこの点も含めて、別の意味でも魅力を感じる。それを感覚的に表現すれば、単純に癒されるから。

茶室で時候の茶花や茶道具に囲まれ和菓子と抹茶を頂く。

茶の湯の魅力

私の物覚えの悪さをありのまま受け入れた上でお稽古をしてくださる先生の寛容さに感謝しつつ、先輩の流れるように美しいお点前を拝見しながら催眠状態へと導かれる。最高の「癒し」である。

だが茶の湯に惹かれる理由を理屈で知りたい。そして感覚的ではなく歴史的に理解し

たい。ほとんど職業病である。

そう思っていた折に、偶然、林原美術館館長の熊倉功夫氏の講演を拝聴する機会を得た。

講演の内容は、歴史的に茶の湯を概観するというもの、つまり中世以降の茶道史であった。おおまかに要約すれば、

中世は「数寄」、近世は「遊芸」、

中世の公家にとって、宮仕

えから逃れたくて出家して仏に仕えるには覚悟が必要である。そこで茶の湯に夢中にな

り、数寄者となった。本格的な出家ではなく、ひとときの遁世により世間のことを一切

忘れる。茶名を称して俗世間とは別人になる。つかの間のプチ出家である。茶事が済んだら復飾して俗人に戻る。

近世になると、茶の湯は「遊

そして近代は「趣味」というふうには、各時代における茶の湯の特徴がまとめられていた。時代が激動するなかでも茶の湯が生き延びてきた詳細が理解できた。

なぜ茶の湯に惹かれるのか。

結論的にいえば、遁世と還俗を気軽に繰り返す「プチ出家」であるという答えを得た。

芸」になる。茶の湯の大衆化、つまり素人が気軽に楽しむわけだ。平和で安定した江戸時代には茶の湯が家業化されて家元制度が誕生した。大都市江戸の繁栄がこれを支えた。

茶の湯の魅力は何か。それは遁世と還俗の往復運動である。ただし現実社会への帰りで迷わないようほどほどに。